

中国における頭蓋崇拜の系譜試探

——祖神崇拜の祖型として——

池田末利

〔論文要旨〕 私は一九五六年に、中国における祖神崇拜の祖型としての頭蓋崇拜の存在を仮説として発表した。最近二十年來の発掘の進展によって、それが実証されつつある。すなわち、(1)新石器時代では、(a)仰韶期に属する西安半坡を含む三ヶ所の遺址から、(b)龍山期に属する河北潤溝村遺址から、それぞれ宗教的目的のための複葬による頭蓋が出現している。(2)殷代末期には、人間の頭蓋に契刻した卜辞が数列見える。周代には、まだ頭蓋のみの出土を見ていないが、(3)漢初の雲南晋寧石寨山の滇族の古墓群からは、明らかに頭蓋の祭祀を表わした青銅器の図象が出土した。それは祖神の祭祀であると同時に、増殖儀礼でもある。

これらの遺址や遺物が示す頭蓋崇拜の間の直接的な系譜関係は、今のところ判然しないにしても、その民族文化の背景を考慮に入れれば、少くとも潜在的な関聯を考えることは可能であり、今後の発掘によって、それが顕在化するであろうことを確信するものである。

〔キーワード〕 古代中国、祖先崇拜、頭蓋崇拜、複葬 (double burials)、増殖儀礼

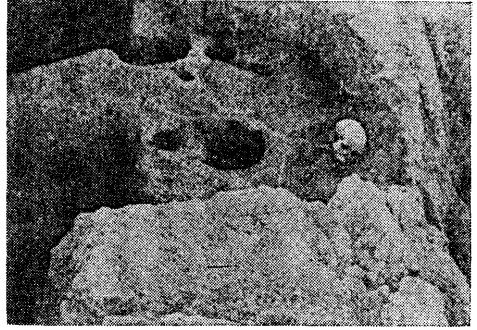
周知のように、古代中国の宗教的崇拜の対象は天神・地示（祇）・人鬼に三分される（周礼大宗伯）。祖神は一般に人鬼や鬼神などと汎称されるが、文献においてそうであるに過ぎない。地下資料としての卜辞や金文（青銅器銘文）に既に「鬼」字が見えるが、必ずしも祖神の意味には用いられていない⁽¹⁾。しかし、祖神が鬼と表現されることには、それなりの理由がなければならぬ。そこで、鬼とは何かを追溯すれば、祖神崇拜の溯源形態がある程度窺知できるはずであるが、文献では既に祖神としてとり扱われ、儒教倫理ないしは哲学的解釈しか与えられていないから、文献だけをいくら探索してみてもわからない。幸いなことに、中国の文字は単なる表音文字ではなく、形・音・義（意味）の三要素を具えている点で、他に類例を見ない独自性をもっている。そこで、「鬼」なる文字を分析的に徹底して追求すれば、祖神崇拜の原初の姿がある程度は把めるのではないか。つまり、文字も一つの考古学的遺物と見なす「文字考古学」とでもいべき方法である。こうした方法で、宗教に限らず、文化現象を溯源することは、既にいくらかは行われている。この方法によって、私も「鬼」を追求した結果、中国における祖神崇拜の溯源形態として、一種の頭蓋崇拜が存在したはずとの仮説に到達した⁽²⁾。しかし、その証料としては、卜辞の人頭刻辞に若干の痕跡を見出した（後述）だけで、具体的な遺址を得るに到っていないかった。ところが、周知のように、ここ三十年來、中国の考古学は、量的にも質的にも飛躍的展開を示し、今や古代史の再構成を迫られる段階にまで達している。陸統として発表される報告や論考を検索しているうちに、頭蓋崇拜の遺構と思われるものが出て来て、既に一、二の中国学者によってとり上げられている。仮説を傍証し得る段階に、今や十分とはいえなくとも到達していると考えて、改めてこれらの資料

を検討するとともに、可能な限り、その系譜をたどってみようとするものである。

一

頭蓋崇拜 (skull cult) の意義や、その宗教文化圏、随伴する複葬 (double burials) や仮面舞踏・人身供犠などの中国における証例については、既に考察したが、その際、宗教民族学的な位置づけにおいて負う所の多かつた棚瀬襄爾氏の業績のほかに、その遺著『他界觀念の原始形態——オセアニアを中心として——』⁽³⁾が、氏の逝去後に刊行された。その中に頭蓋保存や複葬の意義・目的が詳細に述べられている。⁽⁴⁾元来、頭蓋の保存は頭骨だけではあっても一種の改葬であれば、複葬と密着するのは自明である。頭骸は祖先のものを保存して崇拜の対象とするのであるが、棚瀬氏によると、首狩りが発生すれば、敵の頭蓋をもって代置せしめることになる。首狩りの起源については諸説があるが、外的頭蓋崇拜の前提としての近親頭蓋崇拜が考えられねばならず、近親頭蓋に力が認められれば、首狩りによる頭蓋にも力が認められて、呪物ともなり、農耕社会では増殖儀礼に用いられることにもなる。首狩りが盛行すれば複葬の必要はなくなるが、マレーシャでは近親頭蓋の発掘時に首狩りを行ったり、死者の直系親族の服喪は首狩りによって解除される⁽⁵⁾という。このことは、外的頭蓋崇拜が近親のその変化形態であることを示すものといえよう。近親頭蓋崇拜の中でも、祖先崇拜が有力な農耕社会では、祖・父のそれが最も崇拜されることはいうまでもない。棚瀬氏はまた、マレーシャの吊葬儀礼が人身供犠を伴うこと、外者の首の代りに奴隷が用いられる場合があると⁽⁶⁾するが、中国では、殷虚墓葬の夥しい人殉や人祭⁽⁷⁾の起源に一つの示唆を与えるものである。

さて、中国の新石器遺址は解放後殆んど全土から発現して、一九二一年以来の仰韶彩陶文化と龍山黒陶文化といっ



(1) 半坡住屋下の人頭骨

た、従前の単純な形式では説明できなくなっている。出土地域が異れば類型も異なる多様な文化遺址が出現して、極めて複雑な様相を呈しており、その体系化・系統化については今日なお多くの問題を残している。ここでは、そうした問題は考古学の専家に譲り、黄河上域の仰韶文化と、下域の龍山文化とに大別して見てゆくことにする。⁽⁸⁾

仰韶文化遺址からは、頭蓋崇拜とはっきり断定できる遺構はまだ発現していないが、その可能性を有するものが三ヶ所から出土している。その一つは、一九五四年から七年までに五回ほど発掘された西安半坡村の遺址で、長方形の住居址南壁下の白灰層から一個の人頭骨が出土した。⁽⁹⁾この住居址は特定個人のものではなく、共同住屋と推定される点において、ボルネオなどで遺骸を収めた棺を置く共

同家屋⁽¹⁰⁾を想わせるものがあるが、頭骨は肢骨を伴わないことから見て、単なる埋葬ではない。殷虚宗廟の奠基を思わせるが、傍らに破砕された粗陶罐が埋置されている。これを農作物の容器と見れば、フレイザーなどという一種の増殖儀礼と見ることもできようが、⁽¹¹⁾何らかの呪術的目的によることには疑いあるまい。⁽¹²⁾その二は、一九五九年出土した、半坡類型に属する陝西邠県下孟村仰韶遺址で、堆積坑第三灰土層の堆積陶片の中から人頭骨三個が出土した。⁽¹³⁾この頭骨も単純埋葬でないのは、別置されていることから明かであろう。その三は、一九六六年に、同じく半坡類型の北京市郊外東胡林仰韶遺址から二個の成人頭骨片が、十六歳前後の女性人骨と一緒に出土したが、⁽¹⁴⁾一般墓葬とは区別された灰坑内二次埋葬である。一般に、灰坑は食料貯蔵のための袋形窖穴であるから、増殖などの農耕儀礼に供用された可能性が強い。以上の半坡型仰韶墓葬の頭蓋は、二次処理を経た呪術的目的を有するものと推定されるが、頭蓋

は一旦埋葬されたものを掘り起して改葬する点では、一種の複葬である。

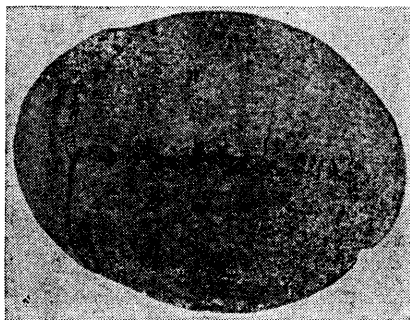
複葬については、既に屢々触れたが、屍体を特定の場所に置いて血・肉の腐爛を待ち、骨髄だけを拾集して改めて第二次の埋葬を行う意味からは二次葬 (secondary burials) とも、場所を遷すことからは遷葬とも呼ばれるが、中国では二次葬の名称が一般に使用されている。人間に属する血・肉を払拭した骨髄のみの正式埋葬によって、始めて霊界に入り得るとの觀念に基くもので、墓葬の屍骨は当然擾乱し、骨髄は破碎されて残缺していることからは、また残骨葬 (fractional burials) とも呼ばれ、今日なお多くの未開族の間に行われている⁽¹⁷⁾。仰韶墓葬に二次葬や残骨葬の存することは、既に夏鼎⁽¹⁸⁾や王仲殊⁽¹⁹⁾を始め、多くの発掘報告に指摘するところであるが、これ等を総括する田河楨昭氏によると、仰韶文化十六 (半坡型十一・廟底溝型五)、青蓮崗 (江蘇) 文化三、甘肅仰韶文化四 (馬家窖期一・馬歇期二・半山期一)、齊家文化二、寺窪文化一で、その地域は吉林・甘肅・寧夏・陝西・山西・河南・湖北・江蘇・四川の九省に及ぶ⁽²⁰⁾というが、このほかにも、青海大通県上孫家寨の馬家窖型と辛店文化⁽²¹⁾、甘肅蘭州から貴徳に至る黄河上流と、その支流一帯を中心とする辛店文化⁽²²⁾、青海土着の卡約文化⁽²³⁾などがある。これ等の二次葬では、頭蓋の特殊なとり扱いは認められないが、前にも指摘したように頭蓋保存と二次葬とは密切に聯関するから、頭蓋遺址発現の今後の可能性が十分に考えられる。同時に、これ等の葬制が文献上の儀礼士喪礼を始め、屢々引用される墨子尚賢篇や列子湯問篇などに見える複葬の祖型であることも明らかであろう。

仰韶期から龍山期に入ると、よほど明確な形で頭蓋遺構が現れて来る。一九五七年、河北省邯鄲県澗溝村から、龍山文化に属する灰坑七・房基 (住居基址) 一、陶窯二座・水井二口・埋葬四ヶ所が発現した。房基内の三灰坑からは人頭骨四個が出土したが、それ等には傷痕と頭皮を剝いた痕とがあり、斬傷の後に頭皮を剝脱したことが明らかである⁽²⁴⁾。この時にはまだ発掘しなかつた龍山灰坑 (叢葬坑) を、六二年に鄭衡が発掘したが、その中にも頭骨上に六ヶ

(2) 潤溝龍山文化人頭骨 ①出土状況 ②刀割痕人頭骨



①

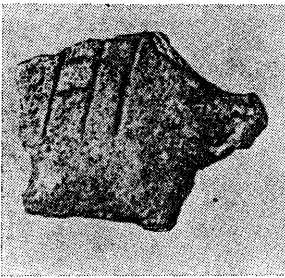


②

との習俗によるもので、インドネシア・太平洋、インディアン・スキタイなどに類例があり、今でも雲南西盟佤族の間に行われているとする⁽²⁵⁾。鄒氏は頭蓋を、勝利の誇示や血祭のためである一般例に従って首狩りによるものと見る⁽²⁶⁾が、果して異部族のものであるか、同部族のものであるかは、発掘状況からだけでは判然しない。ただ、灰坑出土であることから、仰韶の例と同様、増殖儀礼の可能性が考えられる。

所の傷痕を伴う俯身葬が出た。鄒氏は、これを病死ではなく、部落間の抗争による殺戮と断定している。鄒氏はまた、五七年出土の頭骨を、五九年に洗滌して、傷痕は頭皮を剥いだものであることを、中国科学院脊椎動物与古人類研究所の鑑定によって確認した上、性別と推定年齢、傷痕の状況などを詳細に分析した。その結果、頭蓋は人体から切り離したものであるが、骨器として使用したものではなく、原始部落に一般的な首狩りと頭皮剝脱

殷虚や商代遺址からは、上述のような頭蓋遺構は出土していないが、卜辞に見える「某方缶」が、某方（卽邦）首



(3) 人頭骨刻辞

- 右三例は頭骨に直接に契刻した「人頭刻辞」と称するもので、③は国の首長の裔という者を、④は「方」、⑤は護を受けるのである。
- ① 用羌方由于妣庚、王賓、明統六六九 虞・康期
 - ② 其用羌方由于宗、王受又、羌方由其用、王受又、甲五〇七 虞・康期
 - ③ 白鬲、統補九〇六 七武丁期
 - ④ 方白用、京五二八一 乙・辛期
 - ⑤ 人方白、……且乙伐、統補九〇六 八乙・辛期
- 右の由は凶||鬼頭で、羌方の首長の頭蓋を供用して妣庚（||女性祖神）や宗（||祖神の総称）を祭り、その又（||佑護を受けるのである）。

長の頭蓋を祭祀に供用したものであることは、前に指摘した⁽²⁷⁾。そこに引用した陳夢家や趙錫元のほかに、胡厚宣⁽²⁸⁾や塞峰⁽²⁹⁾なども人頭刻辞に言及している。陳・趙二氏は、敵方国首長や異部族の頭蓋を祖神に供祭することによって、その佑護を受けるものと解するが、前には辞例二条を示しただけなので、改めて総括すると（傍線は固有名詞）、

「人」なる国の首長を、それぞれ殺し、その頭蓋によって祖神を祭るのである。

人頭刻辞は極めて異例であるが、五例を通じて見る限り、武丁（初期）— 廩辛・康丁（中期）— 帝乙・帝辛（末期）、つまり卜辞の全期に亘るから、殷代末期（前二三〇〇—二二八）を通じて行われたものと見ることができよう。以上は頭蓋供祭の明白な辞例であるが、敵国首長自身を供祭する場合として、

⑥ 丁卯卜貞、奚_レ緋白_レ鬘、用手_レ丁、後下三三、
九武丁期。

⑦ 亥卜、羌_レ二方白、其用于_レ且_レ丁・父甲、京津四〇三
四龔・康期。

などがある。⁽³¹⁾ 奚を、于省吾は殺の意とするが、羅琨は辮髪した異族俘虜を後ろ手に縛って頭蓋を取る形象の戴の別体とする。⁽³²⁾ 卜辞類見の奚の異体と見れば十分で、于説が適解である。頭蓋は鬘で、中央の口は凶_レ頭蓋を両手に持ち皿

|| 盆に載せる形象であらう。⁽³⁴⁾ とすれば、「緋白（羊に繩をかけた形象で羊に同じ、羊方の首長⁽³⁵⁾）を奚_レし、鬘_レもて丁（|| 祖神の

名）に用ひんか」となる。羌二方伯は二人の羌方の伯長である。これ等の辞例は他部族の頭蓋を自己祖神の祭祀に供

用したことを示すものである。これから新石器期の頭蓋を溯ると、澗溝村の例も単なる戦利品や勝者の荣誉誇示だけ

ではなく、羅氏もいうように、⁽³⁷⁾ 祭祀の供用ではなかったか。また、半坡などの仰韶期の場合も同様の目的ではない

か。商都安陽と邯鄲澗溝村との距離は僅かに九十キロ程度であるが、西安半坡とは直線距離でも五百キロの隔たりが

ある。さらに、澗溝文化の年代は前二五〇〇年前後、⁽³⁸⁾ 仰韶文化はほぼ前三〇〇〇年—二五〇〇年⁽³⁹⁾年で、殷虚文化との間

に一千年以上の差異がある。出土頭蓋が数少なく、中間を埋めるものがない今日、軽々な判断は慎むべきであるが、

大まかにいえば要するに中原漢族の所産であるから、両者の間に何らかの聯繫を考えても、あながち不当ではあるま

い。のみならず、水井技術の文化關聯を探る鄭氏のつぎの考察は興味深い。

鄭氏によると、文献に水井の發明をいうものとして伯益と黄帝とがあるが、伯益説が比較的に信すべきである。伯

益は禹と同時で、その治水事業に参与したが、注意すべきは鑿井技術が聖人の禹ではなく、伯益の発明とされること
 で、今日のところ、夏文化早期遺址中に水井は出現しておらず、夏文化とは関係なさそうである。ところで、伯益
 (＝柏翳)は秦・趙の祖神で「玄鳥が卵を隕^{おと}して」生れたという。卵生伝説は古代東夷地方に、玄鳥伝説は主として河
 北龍山文化の分布地帯に、それぞれ流伝している。今の邯鄲地方は黃河流域における最初の水井発現地であるだけで
 なく、漳河型先商文化の分布地域であり、商の始祖の契は、毛詩玄鳥篇にあるように玄鳥の子孫とされる。とすれ
 ば、鑿井技術発明者の伯益族と商の先人とは、同一地域の可能性がある。伯益の居所について、墨子尚賢篇上に見え
 る陽方の地望は明かでない。孟子万章篇上に益が禹の子を箕山の陽に避けたとあるが、この箕山は河南のそれではな
 く、箕の地名は北方に多いから、伯益が河北にいた可能性が多い。かくして、水井の出現や箕など、皆伯益伝説と関
 係があつて、潤溝龍山文化は少くとも伯益族や、その所属部落を含むものと見ることができ⁽⁴¹⁾、という。水井などを
 繞る潤溝文化と商文化との関係は、これを宗教的側面から見れば、両文化に見える頭蓋崇拜の、少くとも潜在的聯繫
 を想わせるものである。⁽⁴²⁾

三

殷・周間の遺址や出土遺物には、その夥しい発現にも拘わらず、頭蓋遺構は今日のところ見当らない。ずっと降つ
 て漢初になると、銅器に明確な形で現れてくる。漢代ではあるが、その銅器文化は古く遡るので、かなり古い伝統を
 有するものと思われる。それは、中原とはほど遠い雲南晋寧石寨山古墓群からの出土であるが、二者の間には古い
 交渉の可能性が考えられる(後述)。古墓では以前から銅器が出土していたらしいが、正式発掘は一九五五年から六



椎髻



(4) 編髮



○年までに四回行われ、五六―五七年の第二次について『報告』⁽⁴³⁾が出ている。

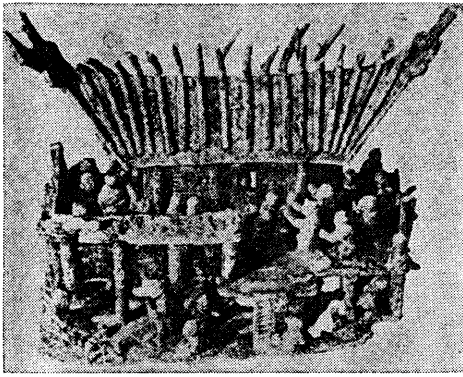
晋寧は省都昆明と滇池を狭んで、その西南に当る。滇池一帯には古くから滇族が住んでいて、石寨山第六号墓からは「滇王之印」なる金印も出土している。⁽⁴⁴⁾ 滇族のことが文献に現れるのは史

記西南夷伝からで、西南夷君長以什数、夜郎最大、其西靡莫之属、以什数、滇最大、……此皆魍結、耕田有邑衆、其外西自同師以东、北至牂榆、为甯・昆明、皆編髮、随畜、遷徙、毋常处、毋君長、(地)方可数千里、云々とある。魍結(魍||椎||鉞、結は髻、髻が錐の形をした髪⁽⁴⁵⁾の結び方)で、君長下にある耕作民の滇族と、編髮で君長のいない遊牧民の昆明族とが対照的に叙述されて

いる。この地方が青銅期に入ったのは定かでないが、前六・七世紀の春秋頃からは既に独自の青銅文化を有し、前二世紀末、漢武帝頃には最高頂に達して、鉄器への過渡期にあったとされる。⁽⁴⁵⁾

石寨山古墓群の時代も戦国末から西漢、下限は東漢晚期から晋初であろうという。今日、雲南省博物館収蔵の青銅器は四、五千件に達しているが、中原の銅器にはない独特な銅鼓・貯貝器などが多く、また策命錫与形式の銘文を鑄刻した殷・周とは異り、文字を有しないため、⁽⁴⁷⁾ 具体的な人物活動の図象で表現している。つまり、図象が銘文の役割りを果すのである。⁽⁴⁸⁾ 出土した十件貯貝

器の上部に嵌め込まれた図象のうち、家屋の模型を伴う三件(= M3: 64, M6: 22, M13: 259)⁽⁴⁹⁾ は「人物・屋宇纏花銅飾物」と称せられるが、伴出の雑銅器を併せ考えると、その時代はほぼ漢の武帝前後から中・晩期のものとされる。⁽⁵¹⁾ 三件の図象に表現された人物の活動場面は、繁簡の差はあっても、基本的には同じである。⁽⁵²⁾ その中の二器(= M3: 64, M6: 22)は、平地に巨木を立てて平かな台とし、周囲に欄を繞らし、前方に階段を設けて、上段に人物、下段に牛羊を養う「干欄」⁽⁵³⁾形式の住屋である。奥には牆があり、その正面中央に小窓が一つ開いていて、露出した人



(5) 雲南晉寧石寨山銅製“千欄”式
建築模型 (M3: 64)

間の頭蓋が嵌め込まれている。窓外の台の上に円形の器物があり、平台には二十数人の男女が坐っている (M3: 64) が、皆滇族である。その右前方には男女が立ち、背後に三叉形の長い布を敷き、両手を挙げて舞踏をしている。また、前面階段の左地上では四人が食物を煮ており、平台上には長机や壺・勺などがあり、正面中央には犬が一匹、下には牛・馬・豚などの家畜がいる。⁽⁵⁴⁾ M6: 22 もほぼ同様であるが、人物は男女十一、二人と少く、前方の板の上に一匹の蛇が昇っている点が異なるだけで、小窓にはやはり人頭が供えられている。M13: 259⁽⁵⁵⁾ は一段と大きく建築も複雑で人物も多いが、基本的には同構で、小窓の人頭は背後から見ると、髻を垂れ下げた滇族女性である。ただ、右隅の柱の背後に男女二人が抱擁がしているのが特異である。

以上の図象に表れた人物活動、特に人頭供用の目的や意義については、見解が分れる。すなわち、①『報告』は、

人物の中に舞踏をする者、簾笙^{ふえ}を吹く者、銅鼓を撃つ者、炊爨する者などがあることから、祭典か祝宴かであろうとしながらも、頭蓋と二人の抱擁とを注意するだけで、解釈を下していない。⁽⁵⁶⁾ ②馮漢驥は、全構図を土地の生育力を増長する増殖儀礼と見る。すなわち、頭蓋は犠牲、男女の雑踏と笙歌の楽舞、食物の炊爨は土地神の宥和と頭蓋への供養とであるが、頭蓋は東南アジアに普遍的な首狩りによるものである。また、男女の交合も解放前の中国西南民族に見られ、増殖儀礼に一般的である。蛇は石寨山銅器に多いが、銅柱に絡むM12: 26の場合など、銅柱とともに滇族のトテムとするのは適当でなく、インドの蕃殖女神 Ellamma などと同様、土地の蕃殖力の象徴であり、雲南人の蛇に対する特別信仰の表現でもある。トテ

ムでは、これを踏みつける出土他器の図象が説明がつかぬ。既に増殖儀礼であれば、頭蓋は滇族農耕の主体が女性であることから見て、アステカ人の玉蜀麦女神 (Maize-goddess) や古代ローマの Saturnia と同類であろうとする。⁽⁸⁸⁾

この馮氏の解釈に疑念を持つ③汪寧生は、全構図を祖神の祭祀と見る。すなわち、図象の中心となる頭蓋については、滇族にも首狩りの習俗はあるが、もしそうであるなら、異部族—この場合は辮髪^{たれがみ}の昆明人であればならぬ。なぜなら、滇池とそれ以西に居住していた昆明人は、常に滇族と戦って俘奴となっていたからである。ところがよく見ると、この頭蓋の頭髮はいわゆる「銀錠髻」(『優頭形の銀塊の形をした髻^{もとどり}、史記の雌結)の滇人女性なので、首狩りでは説明がつかぬ。とすれば、同族で滇人自身の祖先であろう。そこで、敵部族の首を戦利品としたり、神に供祭したりする一方、祖神の頭蓋を保存して直接崇拜するスマトラのバタス人、ニューホブリ島のナンバ人、メラネシア人、ニューギニア人など、アジア南部や太平洋島嶼に一般的に頭蓋崇拜でなければならぬ。小窓の頭体が髪・服を具えて真人のようであるのは、頭骨で人体の模型を製作したもの、住屋はもとニューギニアに見るような祖先頭蓋保存のための神屋か、公所の模倣、屋内人物の舞踏や奏楽は神への供奉、食物の烹熟は祭祀の準備である。また、男女の抱擁は宗教集会を利用した愛の囁きであるが、それが片隅なのは儀式の中心でないことを示している。かくして、これは増殖儀礼ではなくて、祖先頭蓋礼拝の表現である。頭蓋保存と礼拝との目的は判然しないが、メラネシアのように占卜のためか、頭蓋の秘力による村落・家庭の保佑のためかであらうし、文明人の祖先崇敬と実質的には変らぬ一種の祖神儀礼であるが、注意すべきは頭蓋が女性であることで、出土した他の銅飾図象も示すように、滇人農耕社会における生産の主要労働力、儀礼の主体として社会的地位が高い女性の代表的祖先であらうし、滇池地区における母権制の残存を想わせるものでもある⁽⁸⁹⁾という。

銅飾図象の解釈については以上のように、増殖儀礼と見るか、純祖神儀礼と見るか、馮・汪二氏の間相違がある

が、図象のモチーフは、結局、①頭蓋、②舞踏・奏楽、③蛇、④男女の抱擁、となろう。まず、①頭蓋が図象の中心であることには二氏とも異論はないようであるが、首狩り犠牲とするか、祖先とするか、の相違である。首狩り習俗を滇族に認めながら、首狩り頭蓋なら敵対関係にあった昆明人となるが、事実は滇人頭蓋であるとする汪氏には若干の誤解がある。M13:259の頭蓋を、馮氏は拖髮たつかみの滇族女性と断定しているから、他の二器についても必ずしも異族とは見ないで、滇族異部落人女性と解するのであろう。それでも説明はつくが、既に同族とすれば、単なる犠牲なし蕃殖女神と見るよりは、祭祀の中心となっていていことから見ても、祖先とする汪氏の方が整合的であらう。③蛇について、銅柱とともにトテムとする『報告』などの説は根拠がなさそうである。汪氏は何も説明しないが、単なる祖先祭祀であれば、蛇の存在意義は薄くなる。トテムとすれば、別の銅飾図象(6)などと変りはなく、頭蓋の意義がまた薄れてくる。この点からは蕃殖力の象徴とする馮氏の方が興味深い。また、④男女の抱擁については、汪氏の解釈でも通じないことはないが、蛇と同様、馮氏の方が民族学的には有意義である。図象が同族の頭蓋を中心とする祭祀であれば、全構図から祖先儀礼の要素を除去することは困難であらう。しかし、③や④などを併せて考えれば、祭祀の直接対象は祖先の頭蓋であっても、もと農耕社会であれば、作物の豊収や災害の除去などの要素は、祭祀や儀礼から除外できないであらう。とすれば、二氏の解釈は折衷されて、祖先頭蓋を祭つてその佑護による豊収の祈求と見るべきではないか。いずれにしても、具体的な頭蓋中心の儀礼であれば、頭蓋崇拜の有力な証料であることに変わりはない。石寨山銅飾の時代は、新石器期遺址や殷末卜辞などよりは遙かに降るが、かかる習俗は部族間の永い伝統を承けるものであろうし、滇族銅器が前六・七世紀、あるいはもっと古くに溯ることは、このことを裏証している。また、中原漢族と異なる点については、滇族の民族的背景と交渉関係とを見る必要があるが、その前に、類似現象の文献に見えるものとして滇族に近い僚族がある。

今日もそうであるが、華南地区には古くから夥しい少数民族が住みついていて、その系統や相互関係は極めて複雑であり、今日なお不明確な点が多い。前六・七世紀の主要民族としては、僚（獠）・徭・泰・越が挙げられる。僚も滇族と同様、西南夷の一つであるが、その経歴の詳細については芮逸夫などに詳細な考証がある。僚が文献に初見するのは三国志あたりからであるが、魏書僚伝（北史蛮僚伝など、ほぼ同じ）に、僚者、蓋南蛮之別種、自漢中達於邛・笮川洞之間、所在皆有、種類甚多、散居山谷、……依樹積木、以居其上、名曰干蘭、父死則子繼、若中国貴族也、死者豎棺而埋之、……其俗畏鬼神、尤尚淫祀、所殺之人、美鬚髻者、必割其面皮、籠之於竹、及燥、號曰鬼、鼓舞祀之、以求福利、……鑄銅為器、名曰銅鑿、云々とあるによれば、五、六世紀南北朝の頃には、今の陝西の西南、四川の西北・西南から西康の東南あたりまで広い範囲に住み、種類も甚だ多かったようである。住屋は滇族と同じ「干欄」式で、宗教も祖神崇拜、しかも「鬚髻の美しい者」との条件つきではあるが、滇族同様の頭蓋崇拜を有しており、「面皮を割く」など、潤溝村の人頭を想わせる。また、「鬼」は中原漢族の鬼神と同じである。今日はまだ出土を見ないが、既に銅器を製作していたといえ、楽器を有していたはずで、これを鼓舞して祭ること、石寨山銅飾図象と同様であったであろう。かくて僚人も、滇人と住居や宗教・習俗を同じくしたりしたが、問題は両族の頭蓋習俗と、中原漢族との関係、その背景としての民族・文化の交渉である。銅飾図象や文獣の記述をそのままにとれば、中原とは極めて異質で、その間に何らの関聯もなさそうであるが、果してそうであろうか。至難な問題ではあるが、史記や後漢書の記述を、も一度見てみる必要がある。

四

史記にいう西南夷十数国のうち最大の夜郎は、後漢書南蛮西南夷伝によると、漢武帝より少し前に立国したものであるが、もと管子小匡篇に見える牂牁の地で、滇池の東と考えられ、僚人の故地でもある。夜郎の西が靡莫で、その中では滇が最大であったというから、滇族は靡莫の支族であるが、靡莫の語は漢以後には見えず、代って濮が現れる。華陽国志南中志の夷越十数国のうちに滇・濮が連記されている。⁽⁶⁴⁾濮の範圍は雲南の西から四川・西康に及ぶ広域に亘っているが、⁽⁶⁵⁾古くは尚書牧誓に武王とともに紂を伐った八国の一つであり、逸周書王会篇を始め、左伝隠・文・昭公や文選蜀都賦などに濮または百濮として見えている。牧誓の濮の地望については諸説があるが、ほぼ江・漢の流域すなわち湖北西部で、後の楚の西北に当る。⁽⁶⁶⁾すると、当初の湖北から、左伝の百濮（文公十六年）が示すように春秋の頃は西南に広く分布し、⁽⁶⁷⁾戦国・秦・漢を経て更に拡大したようである。そこで、当初は離れていた滇と濮とは次第に接近して四川・雲南一帯に分布した可能性が考えられる。とすれば、もと楚地から起った濮を媒介として楚の文化と交渉するに到ったものと見てよいであろう。このことを裏証するものに莊躡伝説がある。

滇と楚との交渉を示す、史記・後漢書所見の楚莊躡滇王伝説については、前引に続く史記西南夷伝に、始楚、威王時、使將軍莊躡將兵循江上略巴・（蜀）黔中以西、莊躡者、故楚莊王苗裔也、躡至滇池、（地）方三百里、旁平地肥饒數千里、以兵威定屬楚、欲歸報、会秦擊奪楚巴・黔中郡、道塞不通、因還以其衆王滇、變服、從其俗以長之、云々とある。後漢書南蛮西南夷伝には楚威王を頃襄王とし、記述にも若干の相違がある。威王が誤りであることは、古く杜佑の通典や馬端臨の文献通考、これらを承ける梁玉繩の史記志疑などが指摘しているが、比較的最近では、①和田清



- (6) ①石寨山青銅器上所見的形象
②甲骨文中之“僕”字

氏が伝説を根本的に検討して、後漢書などの説話も史記と同一系統で、年代や地理の矛盾を正したに過ぎぬが、原本の史記の記述は矛盾撞着に満ちたもので信馮し難いとする。⁽⁶⁸⁾ ②丙逸夫も威王を誤りとするが、伝説そのものまでも否定しない。⁽⁶⁹⁾ ③馮漢驥も威王を誤りとするが、太史公自序によれば、司馬遷は南中（雲南）に行っており、西南夷伝の論贊でも、莊蹻が滇王となったことを重視しているから、史実は尊重すべきものとする。さらに、晋寧出土文物は漢族に劣らぬ高度の青銅器文化であり、習俗の面でも最近の長沙陳家大山戦国墓出土の帛画や、河南輝県出土の銅鑿が示すように、滇族の束髪が漢族にも見えることなどを併せ考えると、南中のうちでも最高文化の所有者と見る。⁽⁷⁰⁾ また、結髪様式・服飾などから、銅飾図象の滇族とその統属部族とを分類した馮氏説を補止する④汪寧生は、威王の問題には直接触れないが、結髪のみから滇人と周辺部族との関聯を詳細に分析する。その内容は多岐に亘るが、楚との関係について見ると、滇族と似る長沙帛画の婦女髪式は楚の固有ではないが、楚地中における椎髻族の存在、または楚に対する滇族文化の影響を示唆しており、広州出土銅俑の婦女髪式も滇族と同じで、南方を含めた椎髻の広域性を示している。北方関係については、石寨山銅器には北方オールドス式要素が見えて、古代西南地区と、北方や西北地方との連絡が考えられるが、氐・羌族の文化影響は昆明人を通ずる間接的なものでしかない。華陽国志南中志に滇濮の語が見える。卜辞の「僕」は手に箕を捧げ、衣の背後に尾の飾りをつけた家内奴隷の百濮であるが、中原漢族が捉えて奴隷としたもので、滇人が衣に尾をつける習俗と一致する。文献の上で楚と濮との密切な関係を示すものに、国語鄭語の、叔能逃難于濮而蛮と、楚紛冒于是乎始啓濮との二条がある。百濮共同髪式の椎髻族の後の一系統が僚人で、頭蓋・銅鼓・干欄式住屋など滇人と一致する（前述）。後世の僚人の分布は甚だ広く、包括する部落と支系とは複雑で、滇族と完全には比定できないが、同一系統に属す

るのは疑いない、⁽⁷³⁾という。

濮を媒介とする滇・僚と楚との長期に亘る民族文化の交流が、馮・汪氏の考察のようであれば、史記の莊躄伝説もあながち無稽とはいえないであろう。たとえ史実でないとしても、かかる伝説の存在自体が滇・楚の交渉を示唆している。楚地の習俗に呪術的雰囲気が濃厚であったことは、文献の示すところである。⁽⁷⁴⁾独自の文学である楚辞九歌序の昔楚国南郢之邑、玩湘之間、其俗信鬼而好祠など、正に前引の魏書僚伝と同じで、⁽⁷⁵⁾楚辞全体を蔽う宗教的雰囲気は周知の通りである。また、解放前の長沙出土楚帛書や帛画など、極めて呪術的色彩が濃い。⁽⁷⁶⁾頭蓋保存の遺構はまだ江・漢地区からは出土していないが、左伝昭公十一年の、楚子滅蔡、用隠太子于岡山などは、人身供犠の習俗を示している。人身供犠が頭蓋保存と密着することは前述の通りで、肉体の全部または一部を神聖に供用する点において共通している。

楚は古く南方荆山にいて荆楚と称せられ(毛詩殷武・左伝昭公十二年)、蛮夷を以て自ら任じ(史記楚世家)、中原とは異なる言語表現や風習をもっていたようである。最近、江・漢地区における発掘の進展につれて、楚独自文化の本源や中原との交渉が新しく見直されつつある。すなわち、楚の故地からは郢県・長陽などの旧石器文化を始め、大溪・屈家垱(Ⅱ仰韶と龍山の間)・湖北龍山などの新石器文化が発現し、これを継ぐのが楚文化とされるが、⁽⁷⁷⁾一九六三年、黃陂県の盤龍城から商代中期文化の遺址が出土したことは、⁽⁷⁸⁾江・漢地区における商文化の存在を示す大きな衝撃であった。鄒衡によると、盤龍城型の文化は、西は江陵から東は安徽との省境に近い英山にまで及ぶという。⁽⁷⁹⁾とすれば、別に詳論すべき問題ではあるが、商代において、楚の故地は既に中原文化の枠内にあったことになる。一方、汪氏が指摘する(前引)のように、滇族青銅文化に見られる北方オールドス要素や、卜辞「僕」字が示す滇族・殷商の類似習俗などは、宗教文化―頭蓋保存における新石器・殷商文化間の潜在的な関聯を想わせるものであるが、

これは出土資料の乏しい今日、あくまで推測の範囲を脱しない。

結 語

初めに述べたように、頭蓋の保存・崇拝は、今日では東アジアや太平洋諸島などに盛行しており、また古くは北方スキタイ文化にも見えるとすれば、広く東アジアに普遍的な可能性が考えられる。周知のように、中国の宗教は祖神崇拝を基軸として展開しているが、頭蓋保存は祖神崇拝であると同時にその溯源形態をなすものと考えられる点において、文化圏説的に拡大するというなら、古代中国宗教の宗教民族的位位置づけを示唆するものではないか。本稿は、以前からの仮説を実証すべく、最近の出土資料を中心に頭蓋遺構の実態を明かにするとともに、系譜を摸索せんとしたものであるが、そのためには背景としての民族文化の交流や影響関係にも言及せざるを得なかった。しかし、出土資料は寥々たるものであり、華南少数民族の問題はまだ明確でないのが現状である。解放後の中国考古学の進展は驚異的であるが、とり上げた既出遺構相互間の欠落を埋めるためにも、更に多くの遺址と、民族交流関係を実証すべき多くの遺物との発現を待望しててやまない次第である。

註

- (1) 拙稿「古代支那に於る靈鬼觀念の成立―ト辞宗教論考の一―」(『宗教研究』一五二号、一九五七年)、後に拙著『中国古
代宗教史研究―制度と思想―』、昭和五十六年、東海大学出版会、所収。
- (2) 拙稿「鬼字考―支那に於ける祖神崇拝の原初形態―」(『広島大学文学部紀要』一〇号)、後に改題して、前掲拙著、所収。
- (3) 拙稿1「积死」(『日本中国学会報』二)、2「俳優起源考―上代支那に於る仮面舞蹈と祖神崇拝―」(『支那学研究』一三

号)、3「肆猷禱・饋食考—周礼大宗伯所見の祖神儀礼—」(『広島大学文学部紀要』六号)。ともに、前掲拙著、(3は改題)所収。

- (4)(5)(6) 棚瀬氏、前掲書、昭和四十一年・京都大学東南アジア研究センター、六五五—六五九頁。
- (7) 陳夢家『殷虚卜辭綜述』、科学出版社、一九五六・北京、三二六—三二七頁や、胡厚宣『中国奴隶社会的人殉和人祭』(『文物』一九七四、七・八)など、多くの論考がある。
- (8) 新石器文化の分類・断代についての総括的考察としては、安志敏「新石器時代」(中国科学院考古研究所編『考古学基礎』)安氏「略論中国新石器時代文化的年代問題」(『中国新石器時代論文集』、文物出版社、一九八二・北京)、参照。
- (9) 中国科学院考古研究所・陝西省西安半坡博物館『西安半坡—原始氏族公社聚落遺址—』、文物出版社、一九六三・北京、一八頁。
- (10)(11) 棚瀬氏、前掲書、六五五・六五八頁。
- (12) 横田禎昭『中国古代の東西文化交流』、昭和五十八年・雄山閣、五六頁。
- (13) 陝西考古所涇水隊「陝西郊県下孟村遺址発掘簡報」(『考古』一九六〇・一、三頁)田河(横田)禎昭「仰韶文化の埋葬について」(『考古学研究』二十一卷三号)、五一—五三頁。田河氏も頭蓋骨崇拜の可能性を指摘する。
- (14) 周国興・尤玉桂「北京東胡林村的新石器時代墓葬」(『考古』一九七二・六)二頁以下。田河氏「中国先史時代の二次葬について」(『考古論集』、一九七七・広島)五三頁。
- (15) 安志敏、前掲論文(収載前掲書)四一頁。
- (16) 前掲「釈死」のほか、「古代支那に於ける死者儀礼の特色」(『日本人類学会・日本民族学協会第九回連合大会紀事』昭和三十年)など。
- (17) 下引の夏竦氏論文に J. Hastings; E. R. E., vol. IV, pp. 442-443. E. O. James: *Prehistoric Religion*, 1957, New York, pp. 119-122 を引く。
- (18) 夏氏「臨洮寺窪山発掘記」(『中国考古学報』第四冊)九三—九五頁。
- (19) 王氏「墓葬略説」(『考古通訊』一九五五・一)五七頁。ほかに、劉仕驥『中国葬俗伝奇』、上海書局、一九五七・香港、二二頁、安志敏、前掲「新石器時代」(収載前掲書)四二頁、にも西北地区の二次葬を指摘する。
- (20) (14)引田河氏前掲論文(収載前掲書)五〇八頁。

- (21) 青海省文物管理処考古班「青海省文物工作三十年」(文物編輯委員會編『文物工作三十年』一九七九)一六〇・一六二頁。
 (22) 甘肅省博物館「甘肅省文物工作三十年」(収載同上書)一四二頁。
 (23) (21)引論文(収載前掲書)一六三―一六四頁。
 (24) 北京大学・河北省文化局邯鄲考古發掘隊「一九五七年邯鄲發掘簡報」(『考古』一九五九・一〇)五三一頁。河北省文化局文物工作隊「河北邯鄲潤溝村古遺址發掘簡報」(『考古』一九六一・四)にも、文化遺址についての補足報告がある。
 (25) 鄭氏「關於夏商時期北方地區諸鄰境文化的初步探討」(『夏商周考古學論文集』、文物出版社、一九八〇・北京)二五八―二六〇頁。鄭氏は、河北龍山文化を代表するこの潤溝型文化の分布を、先商文化の漳河型・輝県型と同様、河北太行山の東麓一帯、山西太行山西麓一帯から河南北部の安陽・輝県などの地域を包括するものと見る。
 (26) 下述の殷虚卜辞と同様、首狩りによるとする点では、羅琨「『高宗伐鬼方』史蹟考辨」(胡厚宣編『甲骨文與殷商史』、上海古籍出版社、一九八三・上海)九七頁も同様である。
 (27) 前掲拙著、一九七頁の補記。
 (28) 胡氏、前掲論文(下)(前掲誌八)六二頁。
 (29) 塞峰「甲骨文所見の商代軍制數則」(胡厚宣編『甲骨探史錄』、三聯書店、一九八二・北京)四四二頁。
 (30) 胡氏は羌方白と積する(前掲論文、前掲誌八、六〇頁)が、由とすべきである。
 (31) なお数例があるが省略。前掲、趙・塞峰・羅氏などの論文、参照。
 (32) 于氏「殷代的奚奴」(『東北人民大學人文科學學報』一九五六・一〇)。趙錫元、前掲論文もこれに賛成している。
 (33) 羅氏、前掲論文(収載前掲書)同頁。
 (34) 姚孝達「商代的俘虜」(吉林大學古文字研究室編『古文字研究』一輯)三八一頁の解字がそれである。
 (35) 楊升南「卜辞中所見諸侯對商王室的臣屬關係」(胡氏編『甲骨文與殷商史』)一三二頁には羊方が後に伯爵となったものとするが、胡氏(前掲論文、前掲誌、同頁)に従って伯は長と見る。
 (36) 用は左伝僖公十九年の、宋公使鄭文公用鄒子于次睢之社や、後引の昭公十一年のように人身供犠である。
 (37) 羅氏、前掲論文(収載前掲書)同頁。
 (38) 鄭氏、前掲論文(前掲書)二六〇頁。
 (39) (9)引、中国科学院考古研究所等、前掲書、二二二頁。

- (40) 鄭氏は先商文化の類型を、漳河(河北)型・輝県(河南)型・南関外(河南鄭州)型とに三分する(『試論夏文化』前掲書一七—二二頁)。
- (41) 鄭氏「関于夏商時北方地区諸鄰境文化的初步探討」(前掲書)二六〇—二六三頁。
- (42) 伯益は前述の通り趙の祖先となっているが、戦国時代に趙襄子が智伯の頭蓋に漆を塗って飲器とした故事(『史記』「刺客列伝」)が、この場合、想い合される。
- (43) 雲南省博物館編『雲南晉寧石寨山古墓群発掘報告』、文物出版社、一九五九・北京、図版共二冊、以下『報告』と略称。
- (44) 陳麗珠・馬德嫻「雲南石寨山古墓群清理初記」(『文物參考資料』一九五七・四)五九頁。漢代の通常金印と書式が異なるため、漢王の賜物ではないとの説もあるが、栗原朋信氏は特殊の表現形式と見る(『滇王之印と漢王之印』(『秦漢史の研究』二二〇頁)。
- (45) 汪寧生『雲南考古』、西南人民出版社、一九八〇年・昆明、三三頁。
- (46) 陳・馬氏、前掲論文(前掲誌)一八頁。
- (47) 雲南省博物館「晉寧石寨山出土有関奴隸社会的文物」(『文物』一九五九・五)六一頁。二つの金印や銅鏡・銅銭などに見えるものほかに、文字は出現していない。
- (48) 汪寧生「雲南青銅器叢考」(『考古』一九八一・二)一六六頁。
- (49) M3などは墓の、以下は器物の登録番号。
- (50)(51) 『報告』九二頁。一三二頁以下。
- (52) 『報告』九二頁以下に、各器毎に詳細説明するが、繁瑣に亘るので、今、主として馮漢驥「雲南晉寧石寨山出土銅器研究」若干主要人物活動圖像試釈」(『考古』一九六三・六)による。
- (53) 「干欄」の語は古く『魏書』卷二〇一(後引)に見える一種の pile-dwelling で、古代の長江流域や以南に見える原始建築、今でも華南地区や東南アジア一帯から、北は蒙古・黒龍江流域・シベリアなどに見られ、古くは新石器期まで溯り得るという。安志敏「干欄」式建築的考古研究」(『考古學報』一九六三・二)六八頁以下に、本器をも含めた詳考がある。
- (54) 『報告』図版八六・二、参照。
- (55) 『報告』図版八六・一。家屋模型を伴わぬ貯貝器銅飾にも、柱に蛇が絡んでいる。
- (56) 『報告』九四頁。

- (57) 『報告』七六頁。(47)引雲南省博物館論文(前掲誌)同頁も銅柱をトテムとする。
- (58) 馮氏、前掲論文(前掲誌)三二二頁以下。
- (59) 汪氏、前掲論文(前掲誌)一六七頁以下。なお、雲南祥雲県大波那村や、江川県李家山から出土した類似の干欄式家屋模型には、人物や頭蓋の小窓はないが、汪氏は簡略化したもので、石寨山の場合は、墓の主人が神屋の管理責任者、宗教行事や部落の支配者であろうという。また林声も頭蓋は首狩りによるものか、祖先のものであるかと見て、銅飾とは別の墓葬出土の短杖の杖身にある人頭紋四個を首狩り習俗の反映とする(『試釈雲南晉寧石寨山出土銅器的陶画文字』、『文物』一九六四・五)三七頁)。しかし、報告に杖の頭飾は見えても(九四一九五頁)、杖身人頭紋は見えない。
- (60) 馮氏、前掲論文(前掲誌)三二二頁。
- (61) 例えば「殺人祭銅柱場面」(『報告』七五頁)。
- (62) 芮氏「僚人考」(『中央研究院歷史語言研究所集刊』第二八期下冊)以下の記述はこの論文に負うところが多く、西南夷四族説は芮氏の引く Wolfran Eberhard による。
- (63) 「之を竹に籠し」は、以前に指摘した、鬼頭の竹籠を想起させる。前掲拙稿「鬼字考」(前掲拙著)一五七頁以下。
- (64) 馮漢驥は滇濮を連読して滇を濮の一種とする説を非とする(『雲南晉寧石寨山出土文物族属問題試探』、『考古』一九六一・九)四八六頁)。(72)参照。
- (65) 芮氏、前掲論文(前掲誌)七三八頁。
- (66) 拙訳注『尚書』昭和五十一年・集英社(『全釈漢文大系第十一卷』)、二三七頁、参照。
- (67) 蒙文通「百濮南徙」(『周秦少數民族研究』、龍門聯合書局、一九五八・上海)四六頁、董恩正『古代的巴蜀』、四川新華書店、一九七九・成都、四三頁、参照。
- (68) 和田氏「滇王莊蹻故事」(『羽田博士頌寿記念東洋史論叢』昭和二十五年・東洋史研究会)九九五—一〇〇三頁。
- (69) 芮氏、前掲論文(前掲誌)七三七頁。
- (70) 馮氏、前掲「族属問題試探」(前掲誌)四八〇—四八一頁。
- (71) 毛詩にも見える古代チベット系の民族で、氏は農耕・遊牧を兼ね、羌は遊牧系である。
- (72) 汪氏は(64)引の滇濮連読説をとるのである。原文のほかの国名が皆二字であることから見れば、連読説も肯けないことはないが、馮氏が斥けるように、『史記』だけでなく、『南中志』の記述とも合わない。芮氏も単言に読んでいる(前掲論文

(前掲誌) 七三六頁。

(73) 汪氏「雲南石寨山青銅器図象所見古代民族考」(『考古学報』一九七九、四) 四三二—四三三八頁。

(74) 『列子』「說符」篇に、楚人鬼、越人禱とあり、『漢書』「地理志」に、楚地、……信巫鬼、重淫祀、同「郊祀志」に、楚懷王隆祭祀、重淫祀とある。

(75) 馬世之「楚文化探源」(河南省考古学会編、『楚文化研究論文集』、中州書画社、一九八三、鄭州、八九頁、李建「楚俗尚鬼浅釈」(湖北省楚史研究会・武漢師範学院編輯部編『楚史研究專輯』、一九八二、長沙) 一四七頁以下、など参照。

(76) 商承祚「戦国楚帛書述略」(『文物』一九六四・四)、参照。

(77) 李紹連「楚文化起源的幾個問題」(『楚文化研究論文集』) 一〇三頁。なお、江・漢地区の発掘状況については、湖北省博物館『湖北省文物考古工作新収獲』(21) 引収載前掲書、二九五頁以下に詳しい。

(78) 湖北省博物館「一九六三年湖北黃陂盤龍城商代遺址的発掘」(『文物』一九七六・一)。

(79) 鄭氏「試論夏文化」(前掲書) 一二六頁。

附記

○挿図引用文献 (1) 『西安半坡』 図版二二。(2) 鄭衡、前掲書、図版三五。(3) 陳夢家、前掲書、図版一三。(4) 馮漢驥、前掲論文「族属問題試探」(前掲誌) 四七九頁。(5) 安志敏「干欄」式建築的考古研究」(前掲誌) 図版一。(6) 汪寧生、前掲論文「古代民族考」(前掲誌) 四三七頁。

○引用した中国人論・著の標題名は、簡化文字を日本漢字に改めた。原著者の諒恕を請う。

追記 本稿中の滇池地区の青銅期について、晋寧西北の楚雄景からは春秋期の、更に西北の劍川景からは商代後期の、それぞれ青銅器が出土していて、地方的色彩を有しながらも、中原文化の影響や聯繫が考えられることが、本稿提出後に判ったことを追記しておく。